

医学部受験者に医師を志す覚悟を促す 「医学部小論文・面接講座」

今年も卒業生の10%以上が国公立大学医学部に進学した海城中学高等学校では、10年前から医学部志望の生徒のために、「医学部小論文・面接講座」を開講している。入試対策講座ではあるが、現代の医療や医学に関する課題や最新のテーマを取り上げてディスカッションを行うことで、医師という職業への理解と志望を深める狙いもある。講座に参加した上で、講義担当チームの2人の先生方にお話を伺った。



Kaijo Report 医師と患者の関係を考えさせられた80分

5月のある土曜日、「医学部小論文・面接講座」に参加した――。
「カルテ開示の法制化や『患者様』の呼称の普及などに見られるように、医師・患者関係は変化しつつあります」。授業冒頭で林敬先生が、前回の話題を振り返り、今回のテーマであるインフォームドコンセントの解説へつなげていく。ホスピスを取り上げ、医師と患者の関係はどうあるべきか、様々な視点を提示していく。
続いて、中村陽一先生による、小論文を書くときの留

意点についての説明があり、ディスカッションがスタート。司会役の八塚憲郎先生が、インフォームドコンセントとは何か、大切なことは患者に提供される情報量の問題なのか医師への信頼感なのか、その信頼感はどう醸成されるのか、生徒だけでなく教員も巻き込み、医師と患者の関係のあり方をめぐる本質的な議論をリードしていく。
授業の終わりまで息つく暇もないほどの濃密な時間が流れ、医療や医師のあり方について深く考えさせられるひとときを、生徒たちと共有した。

現代医療の話題を取り上げ 医師志望者の高い意識を涵養

――密度の高い授業でしたが、この講座にはどんな狙いがあるのですか。

林 医学部を選択することは他の学部とは異なり、職業選択そのものです。入学後に適性がなかったとか、気持ちが変わったというのでは、本人も困りますし社会にとっても損失です。しかも日本の学校では、医療・医学の問題を教えていません。自らの職業をめぐる状況を知らないまま医学部に進んでほしくないという思いから、現代日本の医療・医学の現実を考えてもらいたい。その上で、どうしても医師になるんだという強い覚悟を促す支援をした。――この講座を始めました。

――どんな生徒が受講し、何を期待しているのでしょうか。

中村 選抜は行わず、希望者は全員受講できます。医学部志望者の多くが受講しています。小論文と面接に関する入試対策への期待が最も大きいのは確かですが、本当に医師になりたいと考えている生徒にとっては、医学部に進んでから、あるいは医師になつてから当然身につけておくべき素養を学ぶことへの期待も大きいと思います。

――講座全体の流れを教えてください。

林 この講座は高校2年3学期からいきましたが、それぞれ役割は決まっています。――

中村 テーマごとに取り上げる話題の解説やディスカッションは、2名の社会科教員が担当します。再生医療など先端医療に関わる生命科学的なトピックは理科教員が解説します。そして小論文の指導は2名の国語科教員が受け持ちます。この役割分担だけでなく、全ての授業で5名の教員が連携することで、1つのテーマについて重層的な理解が進むのだと思います。

――生徒はどんな感想をもっているのでしょうか。

中村 「迷いながらも、最後は本当に医師になりたいという気持ちが強くなった」とか「大変な仕事だと分かって、かえってやりがいを感じているようになった」という感想を寄せてきています。大学入試の突破を目指すことは大前提ですが、将来彼らが医師になつた時に、この講座を通して皆で学びあつた経験が活かされたらと願っています。

林 卒業生からは「海城でこういう試みをしてくれたおかげで、大学のスタートラインで相当なアドバンテージがあった」という言葉をいただきます。こうした声を聞くたびに、この講座をさらに充実させ、医師をめざす生徒の支援にいつそう力を入れて社会的に貢献したいという思いを新たにしています。

スタートし、原則として毎週土曜日に開講します。学期ごとにテーマが決まっており、最初は「医師志望論」、3年1学期が「医師・患者関係論」、夏休みが「地域医療論」、2学期が「先端医療論」です。毎回、各テーマに関する話題性のあるトピックを取り上げて様々な視点や見解を学び、考え、議論して



社会科教諭 林敬先生

小論文にまとめるスタイルを進めています。3年3学期には「模擬面接」を行います。つまり、医療や医学に関する問題について、自分なりに理解を深めたことを、文章や口頭で表現する技術を磨いていく講座なのです。

仲間の意見を共有して 自分の考えを深める共同思考

――ディスカッションを講座に組み込まれているのはなぜですか。
中村 ディスカッションは、自分の想いを自分の言葉で表現しあうような場です。同級生の意見に触発されて新しい気づきが生まれることはもちろんで



国語科教諭 中村陽一先生

ですが、教員も発言するので、立場や年齢が異なる人の意見に触れ、扱っているテーマに関する考え方の幅が広がることもあるのではないのでしょうか。
林 教員は30～50歳代で、専門家として、あるいは幼い子供や高齢の親をもつ一人の大人として発言しているようです。生徒たちが将来出会うであろう患者を代弁しているという意識もありますし、できるだけ異なる視点から意見を述べようとしています。
――今回、小論文の課題が提示されましたが、小論文はどのように指導されているのですか。
中村 小論文は学期のテーマに合わせて1学期に1本書かせています。提出された文章を国語科の教員が添削し、書き直しをさせます。何本かは教員が生徒の文章を活かしながら書き直した上で元の文章と同時に提示し、どのように書けばよいか全員で議論します。そうして、読み手に、自分の表現をきちんと伝えるための文章の型を身につけてもらいます。

――最後に「おみやげプリント」を配っていましたが、どんな内容ですか。
林 この講座は、生徒が「週に一度は、自分がなぜ医師になりたいのかを再確認する場」でもあります。医療や医学について学ぶことで、医師へのモチベーションをかき立て、次の1週間の受験勉強の大変さを乗り切ろうという気持ちになるわけです。そこで、80分間の授業には入りきらなかった情報や関連知識を、通学途中に読みきれられる程度の分量にまとめて配っています。

海城OBの医師、医療関係者を 特別企画として招聘

――通常の講座とは別に、各学期に特別な企画があるそうですね。

林 医療・医学の話題について、できれば教員以外の人からの情報も伝えたいと、これまで海城OBの医師や医学生に、大学での医学の学び方や、医療現場で考えていることなどを話してもらう特別講座を企画してきました。昨年からは、看護師にも来ていただいています。今年は、精神看護の専門性をもつ「リエゾンナース」と呼ばれる専門職看護師も含めた看護師2名と、作業療法士の方をお呼びし、医療チームの一員からみた医師像などについて話してもらおう予定です。

――今回も5人の教員が参加されて